

コメント:リスクパネル「リスク時代の企業経営」.

早稲田大学 立脇和夫

このパネルのテーマは「リスク時代の企業経営」であるが、ビジネスにリスクはつきものであり、リスクのないビジネスなど存在しないであろう。実際、ビジネスに限らず、リスクは古今東西を問わず存在している。地震、雷、風水害などの自然災害もあれば、戦争、テロ・犯罪などの人災もある。しかも、犯罪は近年凶悪化しつつあり、ATM がショベルカーで丸ごと持っていかれることも珍しくない。

しかし、ビジネス、とくに金融機関の場合、信用リスク、流動性リスク及び市場リスク(金利リスク、価格変動リスク及び為替リスク)が一般に指摘されている。1970年代以降の金融の自由化、国際化、グローバル化の進展に伴い、市況の変化が激しくなり、市場リスクが非常に大きくなっている。

報告の中で、酒井先生は、まず、リネクは何か、ということから始めて、自らリスクの経済学の系譜を明らかにされた。先生によれば、「リスクとは、状況の如何によって、一つの行為から複数個の結果が生まれること」である。それは人間の生活維持や社会経済に対して、プラスとマイナスの両面をもつ。そして、リスクの経済学では、「ヤミの時代」「アバの時代」「ノモの時代」「アマの時代」「ミチの時代」へとつながる。また酒井先生は、近江商人のリスク管理にも言及された。

次に、藤井先生は、ジャーナリストだけあって、最近世界的に注目されている環境保全の観点から、環境リスクの重要性を強調された。環境リスクとは耳慣れない言葉であるが、こうした言葉が使われること自体、環境問題への関心が各方面で高まっている証拠であると思われる。

3番目に、高田先生は、銀行経営者の立場から、環境問題に配慮しながら、各種のリスクにどう対処するかについて論じられた。高田先生は、伝統的なサウンド・バンキングを超えて、積極果敢にリスクに挑戦していく、という攻めの経営戦略を展開され、大いに刺激を受けた次第である。

そこで、以下、3先生にそれぞれ質問を呈示し、ご教示を願いたいと考える。

まず、酒井先生への質問です。先生は、リスク管理者としての近江商人に言及され、「士魂商才」について述べられた。しかし、明治初期における多くの武士の経験から、一般に「武士の商法」は失敗の典型のように云われている。近江商人の場合、なぜ「武士の商法」に陥らず、成功して「士魂商才」といわれるようになったのか、それは近江商人の努力だったか、それとも幸運だったのか、その原因についての見解をうかがいたい。

次に、藤井先生にお聞きしたい。先生は金融機関の融資など諸活動を行うに当たって、

環境への配慮が重要である点を強調された。また、融資先の評価に当たって、既存の財務格付けに加えて、環境・社会的側面の評価を考慮されるよう主張される。今日、環境問題が各方面で大きな関心事となっているのは事実だが、それは同時に追加的コストを必要とする。ただでさえ、金融機関の経営環境が厳しい今日、環境配慮に伴うコスト増と、収益性の向上をどのように両立させていくのか、具体的にご説明願いたい。

高田先生は、リスクの時代にあって、積極経営を展開し、リスクに積極果敢に挑戦する姿勢を示された。これは、オーソドックスな「サウンド・バイキング」に相反するものである。正統派なら、リスクの回避、リスクの分散を選択するであろう。リスクへの挑戦は、リスクの拡大を意味する。高田先生は、積極経営が銀行の経営基盤を脅かして、ひいては銀行の社会的責任を果たすうえで、支障をきたすことはない、と考えておられるだろうか。所見をお聞きしたい。